

よしつねせんぼんざくら

義経千本桜

〔解説〕 竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっています。

三段目 維盛の妻子、若葉の内侍（ないし）と若君六代（ろくだい）君は、主馬小金吾（しゅめのこきん）この供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます。内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死にしますが、そこへ通りかかった鮎屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切って持ち帰ります。

〔すしやの段〕 弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であったため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮎屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。母親に金の無心しようと思ひ込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入った鮎桶を出しますが、その中に会ったのは権太が母親から騙し取った金でした。そこへ権太が首の入った鮎桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であったと父に告げるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

すしやの段

春は来ねども花咲かす、娘が漬けた鮓ならば、なれがよかると買ひにくる。風味も吉野、下市に売り広めたる所の名物、釣瓶鮓屋の弥左衛門、留守のうちにも商売に、抜け目も内儀がはや漬に、娘お里が片襷、裾に前垂はや／＼と、愛に愛持つ鮓の酢、押さへてしめてなれさする、うまい盛りの振袖が、釣瓶鮓とはものらし。縮木に栓を打ち込んで、桶片付けて、

「申し母様、昨日父様の言はしやるには、明日の晩には内の弥助と祝言さす程に、世間晴れて女夫になれと仰つたが、日が暮れてもお帰らないは、嘘かいなア」
「オ、あの言やることはいの。なんの嘘であらうぞ。器量のよいを見込みに熊野参りから連れて戻つて、気も心も知ると弥助といふわが名を譲り、主は弥左衛門ぬし

と改めて内の事任せて置かしやるは、そなたと娶はず兼ねての心。今日は俄に役所から親父殿を呼びに来て思はぬ隙入り。もふ迎ひにやるにも人はなし」

「サイナア、折悪ふ弥助殿も方々から鮓の誂へ、仕込みの桶が足るまいと、空き桶取りに往かれましたが、もふ戻らるゝでござんしよ」

と、噂半ばへ明桶荷ひ戻る男のとりなりも、利口で伊達で色も香も知る人ぞ知る優男やさおのこ、娘が好いた厚鬢あつぴんに冠かむり着せても憎からず。内へ入る間も待ち兼ねて、お里は嬉しく、

「アレ弥助様の戻らんした。待ち兼ねた遅かつた。もしやどこぞへ寄つてかと、気が廻つた案じた」

と、女房顔して言ふて見る、さすが鮓屋の娘とて、早い馴れとぞ見えにける。母はにこ／＼笑ひを含み、

「イヤコレ弥助殿、気にかけて下さんな。この吉野郷

は弁財天の教へによつて、夫を神とも仏とも戴いてゐよとある天女の掟。その代はり程愷気も深い。また有様は親の孫、瓜の蔓にではござらぬ」

と、言ひくろむれば、

「これはまあ却つて迷惑。段々お世話の上大切なお娘御まで下され、お礼の申し様もござりませぬ。さりながらとかくお前には弥助殿々々と、殿付をなされてさりとは氣の毒。やつぱり弥助、どふせい、かふせいとお心安う、ナ申し」

「イヤ／＼それは赦して下され」

「ソリヤまたなぜでござります」

「さればいの。弥助といふ名はこれまで連れ合ひの呼名。殿付けせずにとふせいかふせいは、勿体なふて言ひ難い。言ひ馴れた通り殿付けさして下され」

と、げに夫をば大切に、思ふ掟を幸ひに、娘へこれを

聞けがしの母の慈悲とぞ聞こえける。お里、弥助は明桶を板間へ並べてある所へ、この家の惣領いがみの権太、門口より乙声で、
おこえ

「母者人々々々」

と、言ひつゝ入ればお里はびつくり、

「アレまた兄様か、よふお出で」

と揉み手する。

「エ、きよと／＼しい、その面なんぢやい。よふ来たがびつくりか。わりやアノ弥助とへ、うまい事してゐるさふなが、コリヤ弥助もよふ聞け。今追い出れてゐても、釜の下の灰までおれが物ぢや。今日は親父の毛虫が役所へ往たと聞いたによつて、ちと母者人に言ふ事があつて来た。二人ながら奥へ失せふ」

と、睨み廻されうぢ／＼と、

「これに」

と言ふて立つ弥助、娘も後に引添ふて、一間へこそは入りにけれ。後に母親溜息つき、

「コリヤまた留守を考へ無心に来たか。性懲りもない腕白者、そのおのれが心から、嫁子があつても足踏み一つさす事ならぬ。聞きやこの村へ来てゐるげなが、互ひに知らねば摺れ合ふても、嫁姑の明き盲目、眼潰れと人々に言はれるが面目ない。エ、不孝者め」

と目に角を、立て変はつたる機嫌にぐんにやり、直ではいかぬといがみの権、思案しかへて、

「申し母者人。今晚参つたは無心ではござりませぬ。お暇乞ひに参りました」

「ソリヤなんで」

「私は遠い所へ参ります程に、親父様もお前にも、随分おめでとう」

と、しほれかければ母は驚き、

「遠い所とはそりやどこへ、どふした訳で何しに行く」と、根問は親の騙され小口、『サアしてやつた』と目をしばたつき、

「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、つひに人の物箸片端、歪んだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前私は大盗人に遭ひました」

「ヒヤア」

「その中に代官所へ上げる年貢銀、三貫目といふもの盗み取られ、言ひ訳もなく仕様もなく、お仕置きに合はふよりはと、覚悟極めてをります。情ない目に遭ひました」

と、かます袖をば顔に当て、しゃくり上げても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の縁へ、届かぬ舌ぞ恨めしき。甘い中にも分けて母親、誠と思ひ共に目を摺り、

「鬼神に横道なしと年貢の銀を盗まれ、死なふと覚悟

はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰、コリヤよふ思ひ知れよ」

「アイ、思ひ知つてはをりますけれど、どふで死なねばなりませんまい」

「コリヤやい」

「あい、あい」

「常のおのが性根故、これも衞りか知らねども、しやうぶ分けにと思ふた銀、親父殿に隠してやる。これでほつとり根性直せ」

と、そろ／＼戸棚へ子の蔭で、親も盗みをする母の、甘い錠さへ明け兼ねる、

「エ、つひ雁首で、こち／＼がよ／＼りまする」

と仕馴れたる、おのが手業を教ゆる不孝、親はわが子が可愛さに地獄の種の三貫目、後をくろめて持つて出で、

「なんぞに包んでやりたいが」

と、限らない程甘い親、

「うまいわろぢや」

といがみの権、鮎の空き桶よい入れ物、

「これへ／＼」

と親子して、銀を漬けたる黄金鮎、蓋閉め栓締め

「サアよいは、これで目立たぬ提げて去ね」

と、親子が工合の最中へ、苦い父親弥左衛門これも疵持つ足の裏、あたふたとして門口を、

「戻った開けい」

とうち叩く、

「南無三、親父」

と内には転倒てんたううろたへ廻り、

「その桶を、こゝへ／＼」

と空き桶と共に並べて親子はひそ／＼、奥と口とへ引

き別れ、息を詰めてぞ入りにける。

神ならず仏ならねばそれども知らぬ道をば行き

迷ふ、若葉の内侍は若君を宿ある方へ預け置き、『手

負のことも頼まん』と思ひ寄る身も縁の端、この家を

見かけ戸を打ち叩き、

「一夜の宿」

と乞ひ給へば、維盛はよい退きしほと表の方、叩くとほそ枢

に声を寄せ、

「この内は鮓商売、宿屋ではござらぬ」

と、愛想のないが愛想となり。

「イヤこれ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜」

と宣ふにぞ、

「断り言ふて帰さん」

と、戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、

『ハツ』と戸を鎖し内の様子、娘の手前もいぶかしく、
そろ／＼立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢の体、表に

内侍は不思議の思ひ、

「今のはどふやらわが夫に、似たと思へど形容、つ

むりも青き下男、よもや」

と思ひ給ふ内、戸を押し開いて維盛卿、

「若葉の内侍か、六代か」

と、宣ふ声に、

「ヒヤア、さてはわが夫」

「父様か」

「ノウなつかしや」

と取り継り、詞はなくて三人は、泣くより他の事ぞな

き。

「まづまづ内へ」

と密かに伴ひ、

「今宵は取り分け都の事、思ひ暮してゐたりしが、親子共に息災で不思議の対面、さりながら某この家にゐる事を、誰が知らせしぞ殊にまた、遙々の旅の空、供連れぬも心得ず」

と、尋ね給へば若葉の君、

「都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門残らず討死と聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてばかり暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ者のある故に、小金吾召し連れお行方を心ざす道追手に出合ひ、可愛や、金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中将維盛様がこのお姿は何事ぞ。袖のないこの羽織に、このおつむりは」と取り付いて、咽び絶へ入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、

「若い女中の寝入端、殊に枕も二つあり、定めてお伽の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の事も思し召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給ふは胴慾」

と恨み給へば、

「ホ、オそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐れあり。わけてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じと、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情け。何が一札返礼と思ふ折柄娘の恋路、つれなく言はゞ過ちあらん。かへつて恩が仇なりと、仮の契りは結べども、女は嫉妬に大事も洩すと、弥左衛門にも口留して、わが身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りし」

と、語り給へば伏したる娘、堪へ兼ねしか声上げて、『わつ』とばかりに泣き出す。

「コハなに故」

と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば、

「ノウこれお待ち下され」

と、涙と共にお里は駆け寄り、

「まづ〜これへ」

と内侍若君上座へ直し、

「私は里と申してこの家の娘。いたづら者憎い奴と、

思し召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色珍しい草中

へ、絵にある様な殿御のお出で、維盛様とは露知らず

女の浅い心から、可愛らしいとらしいと思ひ染め

たが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも知らして

下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、雲居に近

き御方へ、鮎屋の娘が惚れられふか。一生連れ添ふ殿

御ぢやと、思ひ込んでゐるものを、二世の固めは叶は

ぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預かりま

した」

とどうど伏し、身を震はして泣きければ。維盛卿は氣

の毒の、内侍も道理の詫び涙、乾く間もなき折からに、

村の役人駆け来たり戸を叩いて、

「ア、コレ〜、こゝへ梶原様が見へます。内掃除

しておかれい」

と言ひ捨て、立ち帰る。人々『ハツ』と泣く目も晴れ、

「いかゞはせん」

と俄かの仰天、お里は早速さそくに心付き、

「まづ〜親の隠居屋敷上市村へ」

と氣をあせる、

「げにその事は弥左衛門、われにも教へ置きしかど、

最早開かぬ平家の運命、検使を引き受け潔ふ腹搔き切

らん」

と身拵へ、内侍は悲しく、

「コレ、この若のいたいけ盛りを思し召し、ひとまづ
こゝを」

と無理矢理に引立て給へば維盛も、子に引かさるゝ後
る髪、是非なくその場を落ち給ふ、御運の程ぞ危ふけ
れ。

様子を聞いたかみがみの権太、勝手口より躍り出で、

「お触れのあつた内侍六代、維盛弥助めせしめてくれ
ん」

と尻引つからげ駆け出すを、

「コレ待つて」

とお里は取り付き、

「兄様、これは一生の私が願ひ、見赦して下され」

と、頼めど聞かず勿ね飛ばし、

「大金になる大仕事、邪魔ひろぐな」

と縦るを蹴倒し張り飛ばし、最前置きし銀の鮓桶、

「これ忘れては」

と引提げて跡を慕ふて、追ふて行く。

「ノウとゝ様、かゝ様」

とお里が呼ぶ声弥左衛門、母も駆け出で、

「何事」

と問へば娘は、

「コレくくく、都から維盛様の御台若君、尋ねさ迷

ひお出であり。積もる話のその中へ詮議に来ると知ら

せを聞き、三人連れで上市へ落としましたを情ない。

兄様が開いてゐて討ち取るか討ち取るか生け捕つて

褒美にするとソレくくくたつた今追つ駆けて」

と、言ふよりびつくり弥左衛門、

「ソレ一大事」

と嗜みの、朱鞘の脇差腰にぼつ込み駆け出す向ふへ、

「ハイ〜〜〜」

と矢筈やはずの提灯梶原平三景時、家米数多あまたに十手を持たせ、道を塞いで、

「ヤア老ぼれめ、いづくへ行く。逃ぐるるとて逃がさるか」

と、追取り巻かれて『ハツ』と吐胸、『先も氣遣ひ、こゝも遁れず』七転八倒心は早鐘、時に時つく如くなり。

「ヤアこいつ横道者。おのれに今日維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと言ひ抜ける。そのまゝにして帰せしは、思ひ寄らず踏込まふため。この家に維盛匿ひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打ち、取る物も取り敢へず来たれども、油断の体はおのれを取り逃すまいため。サア首討つて渡すか、たゞし違背に及ぶか、返答せい」

と責めつけられ、叶はぬ所と胸を据ゑ、

「成程、一旦は匿ひないとは申したれども、あまり御詮議強き故、隠しても隠されず、はや先達て首討つたり。御覧に入れん、お通り」

と、伴ひ入れば母娘、

「どふなること」

と氣遣ふ内、鮓桶引提げ弥左衛門、しづく出でて向ふに直し、

「三位維盛の首、御受け取り下されよ」

と、蓋を取らんとする所を女房駆け寄りちやつと押さへ、

「コレ親父殿、この桶の中にはわしがちつと大事の物を入れて置いた。こなさん開けてどふするぞ」

「オ、われは知るまい。この桶の中には、最前維盛卿のお首を入れ置いた」

「イヤ／＼この桶にはこなたに見せぬ物がある」

と、引き寄せれば引き戻し、

「エ、おのれが何も知らぬ故」

「イヤこなたが知らぬ故」

と、妻は銀と心得て、争ひ果てねば梶原平三、

「さてはこいつら言ひ合はせ、縛れ、括れ」

と下知の下、

「捕つた／＼」

と取り巻く所に、

「維盛夫婦餓鬼めまで、いがみの権太が生け捕つたり、

討ち取つたり」

と呼ばはる声、『ハッ』とばかりに弥左衛門、女房娘

も気は狂乱、いがみの権太はいかめしく、若君内侍を

猿縛り、宙に引立て目通りにどつかと引き据ゑ、

「親父の売僧まいすが三位維盛を熊野浦より連れ帰り、道に

て頭を剃りこぼち、青二才にして弥助と名を替へ、こ

の間はイヤモほてくろしき髯詮索。生け捕つて面恥と

存じたに、思ひの他手強い奴。村の者の手を借つて

漸々と討ち取り、首にいたして持参。イザ御実檢」

と差し出だす、

「ム、成程々々。剃りこぼち弥助といふは存じながら、

先達て言はぬは弥左衛門めに、思ひ違ひをさそふため、

聞き及んだいがみの権太。悪者と聞いたがお上へ対し

ては忠義の者、オ、出かいた／＼。内侍、六代、生け

捕つたな。ハテよい器量。夢野の鹿で思はずも、女鹿

子鹿の手に入るはあつぱれの働き。褒美には親の弥左

衛門めが命赦してくれふ」

「ア、イヤ／＼申し、親の命位を赦して貰はうと思ふ

て、この働きは致しませぬはい」

「スリヤ親の命は取られても、褒美が欲しいか」

「ハテ、あのわろの命はあのわろと相對。私にはとかくお銀」

と願へば梶原、

「ハ、ハ、ハ、ハテ小氣味のよい奴。褒美くれん」

と着せし羽織、脱いで渡せば仏頂面、

「ア、コリヤ、その羽織はかたじけな忝くも頼朝公のお

召し替へ。何時でも鎌倉へ持ち来たらば、金銀と釣り

換へ、囑託あいもんの合紋」

と聞くより戴き、

「出来た。当世衞りが流行るによつて、二重取り

をさせぬ分別。よふしたもの」

と引き換へに、縄付き渡せば受け取つて、首を器に納

めさせ、

「コリヤ権太、弥左衛門一家いっけの奴等、暫く汝に預くる

ぞ」

「イヤモ、お氣遣ひなされますな。貧乏ゆるぎもさせませぬはい」

「ハテさて健氣な男め」

と、誉めそやして梶原平三、縄付き引立て、立ち帰る。

「ア、これ、そのついでに褒美の銀、忘れまいぞ」

と見送る隙間、油断見合はせ弥左衛門、憎さも憎しと

ひん抱へ、ぐつと突込む恨みの刃、『うん』とのつけ

に反りかへる、見るに親子は『ハア、ハツ』と、憎い

ながらも悲しさの、母は思はず駆け寄つて、

「コリヤ天命知れや不孝の罪、思ひ知れや」

と言ひながら、先立つものは涙にて、伏し沈みてぞ泣

きぬたる。弥左衛門齒噛みをなし、

「ヤア泣くな女房何吠えるのぢや。不憫なの可愛いの

と言ふて、こんな奴を生けて置くは、世界の人の大き

な難儀ぢやはい。門端も踏ますなど言ひつけ置いたに

内へ引き入れ、大事の大事の維盛様を殺し、内侍様や若君をよふ鎌倉へ渡したな。モ、ももふ腹が立つて腹が立つて、涙がこぼれて胸が裂くるわい。三千世界に子を殺す、親といふのはおればつかり、あつぱれ手柄の因果者に、よふしをつた」

と抜き身の柄、砕くるばかりに握り詰め、ゑぐりかけるも心は涙、いがみにいがみし権太郎、刃物押さへて、

「コレ親父殿」

「エ、なんじやれ」

「こなたの力で維盛を助ける事は、叶はぬ〜」

「コリヤ言ふなやい〜。今日幸ひと別れ道の傍らに手負の死人、よい身代りと首討つて戻り、この中に隠し置く。コリヤこれを見をれ」

と、鮓桶取つて打ち明ければ、がらりと出でたる三貫

目、

「ヒヤア、こりや銀ぢや、こりやどぶぢや」

と、呆れ果てたるばかりなり。手負は顔を打ち眺め、「おいとしや親父様、私が性根が悪さに御相談の相手もなく、前髪の首を総髪にして渡さふとは、了簡違ひの危ない所。梶原程の侍が、弥助といふて青二才の男に仕立てあることを、知らいで討手に来ませふか。それと言はぬはあつちも工み。維盛様御夫婦の路銀にせんと盗んだ金、重いを証拠に取り違へた鮓桶、開けてみれば中には首、『ハツ』と思へどこれ幸ひ、月代刺つて突き付けたは、やつぱりお前の仕込みの首」

「ム、そのまた根性で、御台若君に縄を掛け、なぜ鎌倉へ渡したぞ」

「ホ、そのお二人と見へたのは、この権太が女房、倅」

「ヤア、シテ〜維盛様御夫婦、若君はいづくに」

「オ、逢はせませふ〜」

と、袖より出だす一文笛、吹き立つれば、折よしと維盛卿内侍は茶汲みの姿となり、若君連れて駆け付け給ひ、

「弥左衛門夫婦の衆、権太郎へ一礼を。ヤア手を負ふたか」

と驚くも、

「お変りないか」

とびつくりも、一度に興をぞさましける。母は悲しき手負に取り付き、

「かほど正しき性根にて、人に疎まれそじ譏らるゝ、身持ちはずなせにしてくれた。常が常なら連れ合ひが、むさと手疵も負はせまい、むむい事を」

とせき上げて、悔み嘆けば権太郎、

「ヤレそのお悔み無用々々。常が常なら梶原が、身代り喰ふては帰りませぬ。まだそれさへも疑ふて、親の

命を褒美にくれふ、忝ないと言ふと早や、詮議に詮議をかける所存。いがみと見た故油断して、一杯喰ふて

帰りしは、禍も三年と、悪い性根の年の明き時。生ま

れついで勝負に魂奪はれ、今日もあなたを甘商、騙り取つたる荷物の中に、うや／＼しき高位の絵姿、弥助

が顔に生き写し。合点がいかぬと母人へ、金の無心を

匣に入り込み、忍んで聞けば維盛卿。御身に迫る難儀

の段々、この度根性改めずば、いつ親人の御機嫌に預る時節もあるまいと、打つてかへたる悪事の裏。維盛

様の首はあつても、内侍若君の代りに立つ人もなく、

途方にくれし折からに。女房小仙が伴を連れ、『親御

の勘当、古主こしやうへ忠義、何うろたへる事がある。私と

善太をコレかう』と、手を廻すれば伴も、『母様と

一緒に』と、共に廻して縛り縄、掛けても掛けても手

が外れ、結んだ縄もしやら解け、いがんたおれが直すくな

子を、持ったは何の因果ぢやと、思ふては泣き、締め
ては泣き、後ろ手にしたその時の、心は鬼でも蛇心で
も、堪へ兼ねたる血の涙、可愛や不憫や女房も、わつ
と一声その時に、コレ血を吐きました」

と語るにぞ、力み返つて弥左衛門、

「エ、聞こえぬぞよ／＼権太郎。孫めに縄を掛ける時、
血を吐く程の悲しさを、常に持つてはなせくれぬか。
広い世界に嫁一人、孫といふのもあいつ一人ぢやはい。

子供が大勢遊んでゐれば、親の顔を目印に、苦味の走
つた子があるかと、尋ねて見ては、『コレ／＼子供衆、

権太が息子はゐませぬか』と、問へど子供は、『どの

権太、家名はなんと』と尋ねられ、おれが口から満更

に、いがみの権、とは得言はず、悪者の子ぢや故に、
はね出されてをるであらふと、思ふ程猶そちが憎さ、

今直る根性が半年前に直つたら、ノウ婆」

「親父殿、嫁女や孫の顔見覚へて置かふのに」

「オ、おれもそればつかり」

とむせ返り、

「わつ」

とばかり伏し沈む、心ぞ思ひやられたり。

悔みに近き終り際、維盛卿も、

「これまでは仏を銜つて輪廻を離れず、離るゝ時は今

この時」

と、髻もといふつと切り給へば、内侍若君お里は縊り、

「共に尼とも姿を変へ、御宮仕へを赦して」

と、願へど叶はず打ち払ひ／＼、

「内侍は高雄の文覚もんがくへ、六代が事頼まれよ。お里は兄

になり代り、親へ孝行肝要」

と、立ち出で給へば、弥左衛門

「女中の供は年寄の役」

と諸共旅用意、手負を労はる母親が、

「ノウ、これつれない親父殿、権太郎が最期も近し、死目に逢ふて下され」

と、留むるにせき上げ弥左衛門、

「エ、現在血を分けた俵を手に掛け、どふ死目に逢はれふぞ。死んだを見ては一足も歩かるゝものかいの。息ある内は叶はぬまでも、助かる事もあらふかと、思ふがせめての力草、留めるそなたが胴慾」

と、言ふて泣き出す父親に、母は取り分け娘は猶

「不憫々々」

と維盛の、首には輪袈裟手に衣、手向けの文も阿耨あのく

多羅だら、三藐三菩提さんみやくの門出、高雄高野たかおたかのへ引き分くる夫

婦の別れに親子の名残り、手負は見送る顔と顔、思ひ

はいづれ大和路や、吉野に残る名物に、維盛弥助とい

ふ鮓屋、今に栄ふる花の里、その名も高く顕せり。